

合唱活動における指導展開の一試案

著者	日吉 武
雑誌名	鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要
巻	18
ページ	1-10
別言語のタイトル	A Proposal for Training Evolution in Chorus Activities
URL	http://hdl.handle.net/10232/7897

合唱活動における指導展開の一試案

日 吉 武〔鹿児島大学教育学部（音楽教育）〕

A Proposal for Training Evolution in Chorus Activities

HIYOSHI Takeshi

キーワード：音楽科教育、特別活動、選択授業、学習内容の伝達システム、定着と発展を目指す指導

1. はじめに

合唱は、その中に多様な要素を内包している。例えば、よりよく歌うための体ほぐしや体づくり、発声の追究、歌詞への考察、音との向き合い、パートや全体での仲間との協力、より高い音楽表現の追究、コンクールへの挑戦、コンサートづくりなどである。このような多様な要素に対し、一個人としての追究だけでなく、仲間との結び付き（集団）の中で活動の質を高めたり楽曲の表現を高めたりする追究活動ができるところに、合唱活動の魅力はある。

合唱活動は、その内包する要素と魅力からいって、学校現場において極めて有意義な教育活動になり得る。学校には、いろいろな子どもがいる。その子どもたちが、合唱活動に取り組むことで、特にその活動過程において、人を思いやったり、注意しあったり、励まし合うなどの協調性を学ぶことができる。

その一方で、合唱は自分のことを考えさせることもできる。歌詞にメロディーがつけられている合唱は、ことばによる自己表現であり、自分をみつめ、自分に向かい合わせる活動である。合唱に真剣に取り組めば、それは自主性を養い、個性を育むことになる。

合唱という、ともに歌い、過程を重視する活動を通して学ぶことは、深く幅広いものであると言えるだろう。

しかし教育現場からは、合唱活動について次のような問題をよく聞く。例えば、去年の卒業生はよかったが今年の学年は今ひとつ歌わない、校内合唱コンクールの時は頑張るが後が続かない等の問題である。

中学校であれば、ある一つの学年が三年間を通

じて成長し、合唱活動についても継続的に発展した姿を見せることはよくある。しかし、学年の成長という枠を越えて学校全体の合唱活動が年を追うごとに発展していくことがよりのぞましい教育活動の姿であろう。そのような発展を可能にするシステムと方法の構築が必要である。それは即ち、現行学習指導要領の総則にある「系統的、発展的な指導」*1を合唱活動の面において実現することである。

本論は、上記のような課題をもとに、義務教育課程である中学校での合唱指導について学習指導要領を踏まえて検討するとともに、筆者が前勤務校、横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校（以下、附属鎌倉中学校と略す）で行った指導実践の分析を通して、合唱活動における指導展開のあり方について一つの試案を提示することを目指したものである。

2. 中学校における教育活動と合唱活動

(1) 中学校教育課程における合唱活動の位置

中学校の合唱活動は、音楽科の必修授業の中で行われていることはもちろんであるが、その他に特別活動（学校行事や学級活動等）でもよく行われている。

儀式的行事では、ほとんどと言ってよいほど合唱が行われているであろう。入学式や卒業式での全校合唱や学年合唱はそのよい例である。また、各学期の始業式や終業式で合唱をする学校も少なくない。

学芸的行事に合唱が含まれていることも多い。数多くの中学校が、校内合唱コンクールや合唱祭という名称で、クラス合唱の発表会を実施している。その理由に挙げられるのが、合唱が学級づく

りに有効であるということである。

上記のような行事で行われる合唱に向けた活動として、学級活動でも合唱が行われることとなる。その活動過程における教育効果が学級づくりに活きるということで、多くの学校現場で学級中心の合唱活動がさかんなのである。

また音楽科の教育活動では、必修授業だけでなく選択教科の内容として合唱を取りあげている場合も多い。選択教科について現行中学校学習指導要領の第2章第5節「音楽科」では、「生徒の特性等に応じ多様な学習活動が展開できるよう、第2の内容その他の内容で各学校が定めるものについて、課題学習、創造的な表現活動の学習、郷土の伝統芸能など地域の特質を生かした学習、表現の能力を補足的に高める学習、芸術表現を追求する発展的な学習などの学習活動を各学校において適切に工夫して取り扱うものとする」*2とされている。この方針を踏まえ、選択教科「音楽」の内容で合唱を取りあげている場合には、発展的な学習として合唱活動に取り組んでいることが多いと思われる。選択教科の選択生徒で発表会やコンクールに出演しているケースも見られる。

以上見てきたように、学校現場における合唱活動は、音楽科という教科の枠を越えて広範囲に行われている教育活動であると言えよう。そのような教育活動に「合唱」は大変有効なのである。なぜならば合唱活動は必要最小限の場所や設備があれば、あとは生徒が集まればできるという簡便さを持っているからである。合唱こそ、いろいろな展開を可能にしてくれる活動形態なのである。

(2) 附属鎌倉中学校における合唱活動

上述したような有効性を持つ合唱活動を、附属鎌倉中学校は教育活動の柱の一つに据えていた。

附属鎌倉中学校の学校規模は、一学年4学級、全学級数12学級であり、概ね各学年175名、全校生徒数525名である。*3

附属鎌倉中学校の合唱活動は、必修授業での学習を基礎とし、学校行事での取り組みはもちろんのこと、日常の学級活動の一環としても深く根付いたものとして行われている。その活動の特徴は、発表の場を持ちながらの合唱活動が、1年間

を通じまんべんなく展開されている点である。

取り組まれている主な合唱活動には、次の①～⑥があげられる。

- ①必修授業
- ②「朝の歌」(毎週月曜日の朝会における合唱活動)
- ③合唱祭 ④入学式・卒業式の全員合唱
- ⑤有志合唱やクラス単位、学年単位での取り組み
- ⑥第1, 2, 3学年選択授業

それぞれの取り組みについて述べる。

①必修授業

必修授業は、合唱の基礎作りのために重要である。1年生のときから、授業を通じて合唱の魅力に気付かせ、合唱への関心・意欲を高めていくことが、学校全体の合唱活動の充実には欠かせない。音楽の授業以外の時間での合唱活動には、時間的な制約がある。そこでの活動を意味あるものにするためにも、必修授業でしっかりと合唱の基礎・基本を学ばせておくことが大切である。

②「朝の歌」

「朝の歌」とは、毎週月曜日の朝会において、各クラスが3年生から1年生まで順番に体育館ステージでクラス合唱を披露し、発表クラスの演奏に続いて全校生徒でもう一度、同じ曲を全員合唱するという活動である。

演奏する合唱曲は、必修授業の教材であり、全学年全クラスで扱う。選曲は、3年生へのアンケート調査をもとに、学年に応じて難易度を考慮しながら行っている。

毎週月曜日に、必ず合唱披露や全員合唱があるので、それに向けた準備としての合唱活動を学級単位で、という設定ができ、日常的に合唱活動に取り組ませることができていた。毎朝の5分発声練習と1曲歌うという取り組みなど、朝の合唱活動の恒常化を図ることができた。

③合唱祭

毎年10月下旬に鎌倉芸術館大ホールで行う、学級対抗のコンクール形式の発表会である。平成20年度で44回を数える。各学級が全学年共通の課題曲と学級ごとの自由曲の2曲を演奏する。取り組み期間は約40日で、昼休みや放課後の時間も使って熱の入った練習を重ねていく。生徒たちは、

「朝の歌」の成果を踏まえ、細部まで技能と気持ちの行き届いた最高の合唱にしようと努力する。この取り組みは、合唱により、授業と学級活動と学校行事が高度に融合した姿であるといえる。

④入学式・卒業式の全員合唱

入学式では、新2、3年生全員が新入生を迎える歌として混声四部合唱曲「大地讃頌」を披露する。また卒業式では、全校生徒による「大地讃頌」と、卒業生（3年生）による混声四部合唱曲「河口」の全員合唱が披露される。これらの全員合唱は、決して何回もの練習をするわけではない。1年間を通じた授業、学級活動、行事等における合唱活動での学びの成果が発揮される場なのである。

⑤有志合唱やクラス単位、学年単位での取り組み

各学年で行われる宿泊行事や学年集会、始業式や終業・修了式などの機会に合唱活動が行われている。

⑥選択授業

1年生から3年生まで、選択授業では合唱の発展的な学習に取り組んでいる。生徒の希望に最大限応える内容を設定し、選択のメリットである関心・意欲の高さを活かして、充実した活動展開が行われている。

以上のような多様な合唱活動の展開が中学在籍中にわたって絶え間なくあることで、附属鎌倉中学校では、合唱を中心に3年間を見通した音楽教育が、日常の活動と結びついて現実化しているのである。

さらに「朝の歌」「合唱祭」「入学式・卒業式的全員合唱」等の取り組みが、全校を貫く活動であることで、合唱による縦割りの取り組み（例：1～3年生縦割り1組）が可能なことも、3年間を通じた合唱活動をより充実したものとしている。下級生は、上級生の姿から学び、もっと成長したい、先輩を超えたいと考えるようになり、逆に上級生は、下級生に教えたり聴かれ見られたりすることで成長するという、それぞれの効果がある。

また3年間というくりで合唱を見通せるということは、活動に余裕を生むことにもなる。

1年生のときは、上級生を目標としながら、特

に関心・意欲・態度を中心につこつと少しずつ積み上げる。2年生のときは、技能の伸長を図りながらも、合唱における音楽表現の幅広さに出会わせる。3年生のときには、下級生のよき見本としての自覚を持たせ、これまでの学び（音楽だけでなく、学校でのあらゆる学習）の集大成を合唱による音楽表現として目指させる。生徒全員に対するこのような段階的指導と、その成果を発表の場で確認させ、それぞれの段階に応じた成就感と課題意識を持たせられるということが、合唱活動で可能になっているのである。

これらの合唱活動を推進する上で筆者がまず考えの中心に据えていたことは、必修授業での学びを核にした上で、“音楽の授業の時間”にこだわらない合唱活動を展開する、ということである。学校で生徒が過ごす様々な時間を対象に、合唱による学校音楽の環境創造とでもいうべき活動展開を目指したのである。学校の日常に音楽的な空気が流れる、ということが生徒の総合的な音楽表現の醸成と、人間性の伸長に有効だと考えたからである。音楽の授業は、そのための基礎作りの場である一方で、日常の音楽的な空気の一風景でもある、という意識づくりを行った。特に特別活動の時間の使い方がキーワードである。

また、既成の枠を取り払うということも考え実行した。クラス単位で、学年単位で、あるいは教科単位で、という考えのみにとらわれることなく、より広がりのある音楽活動を目指した。それが生徒の心を開き、また心のつながりを深めていくことになると考えたからである。その核になるものが選択授業の指導であった。

以上述べてきたような指導環境と方針の中で、学年の成長という枠を越えて学校全体の合唱活動が年を追うごとに発展していくために、筆者は次の実践を行った。

3. 指導実践の概要

(1) 実践にあたって

学校全体の合唱活動を発展させる実践にあたり、筆者がまずその基盤として指導したのは次の三点である。

①伝達のサイクルをつくる。

3年選択音楽 → 3年普通クラス → 2年選択音楽 → 2年普通クラス → 1年選択音楽・普通クラス

②上級生から下級生に伝達させる。

③上級生が活動も成果も見本になるようにする。

これらの三点は、上級生から下級生までが、教えあい、学びあいの輪でつながることを意味する。学年という枠を越える生徒の結び付きが、学校全体の合唱活動を年々発展させる基盤となると考えたのである。指導内容伝達のシステムがあれば、教師が指導する内容は上級生から下級生に確実に伝わり、学校の中に定着していくことになる。

伝達システムを確立した上で行う音楽的指導のポイントが次の二点である。

①毎年、必ず新しい試みを加える。(技能面・精神面・学習場面それぞれにおいて)

②一度に取り組む内容が多すぎないようにする。指導内容の確実な定着を目指す。

合唱活動を発展させるためには、当然教師は音楽的に新しい指導内容を生徒に教えていくことが不可欠である。そのためにポイント①の意識は常に持っていなければならない。しかし、それを三学年ともに定着させるためには、ポイント②のように指導内容を絞る必要がある。

この点については、現行学習指導要領の総則の「第6 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」の第1(2)に次のような記述がある。

「各教科の各学年、各分野又は各言語の指導内容については、そのまとめ方や重点の置き方に適切な工夫を加えるとともに、教材等の精選を図り、効果的な指導ができるようにすること。」^{*4}

つまり指導内容についての重点化と精選が効果を生むということである。教えすぎは禁物である。

そこで発声・合唱練習における重点的な指導内容は年間三点までに絞り、実践を行った。

なお、本実践は1997年度から2004年度にかけて行ったものである。

(2) 実践の内容

実践は次の三点について行った。(資料参照)

- 発声・合唱練習の改善
- 授業・行事等での取り組み
- 対外的活動

これらのうち、まず「発声・合唱練習の改善」については、各年度で重点をおいて取り組む内容を絞り、その確実な定着を目指す形で行った。

一方、「授業・行事等での取り組み」については、年度ごとに新たな取り組みの試みを行う形、合唱活動が行われる場面を工夫していくという形で行った。

また、「対外的活動」については、合唱活動の発展に伴い学校外からの評価も高まり、演奏会出演や録音依頼、他校との交流等、対外的な合唱活動が生徒の学習活動に加わるという形で行った。

〔1〕発声・合唱練習の改善に関する指導

この実践については、2001年度の一つを除いて、まず3年選択音楽の授業で取り組み、各年度の下半期に3年生から下級生に伝達されるようにした。

□1997年度

○ファルセットへの意識付け

発声をより頭声的に改善するためにファルセットへ意識を向けて行う発声練習を導入した。

○ア・カペラへの意識付け

ア・カペラ(無伴奏の合唱)は合唱の原点である。3年選択音楽でまず数曲取り組み、文化祭で演奏発表した。

□1998年度

○取り上げる楽曲の音域の拡大

3年選択音楽の生徒が参加するコンクールで演奏する自由曲について、音域が前年度より広いものを選曲させた。生徒にとって新たな挑戦となった。

□1999年度

○コンクールでア・カペラ挑戦

3年選択音楽の生徒が参加するコンクールで演奏する自由曲について、無伴奏の曲を選曲させた。附属鎌倉中学校のコンクール参加の歴史において初めてのことであった。

□2000年度

○丹田息の導入

腹式呼吸の練習の改善と精神面の強化をねらいとして、武道から考えを取り入れ「丹田息」の練習を導入した。

○手をつなぐ練習の導入

コンクールに参加するメンバーの心の結びつきをより強め、アンサンブル力を向上させるため、パートや全員で手をつなぎながら練習する方法を導入した。

□2001年度

○1年最初の授業で、トトロ、ミッキー、温かい息の発声練習開始

1年生の4月の授業における歌唱・合唱活動への導入において、極めて効果が高い上記3つの方法を初めて導入した。

○ア・カベラの声部数拡大

3年選択音楽の生徒が参加するコンクールで演奏する自由曲について、無伴奏の上に声部が八部にまで分かれる曲に挑戦した。

○「リスペクトの心」指導開始

当時のサッカー日本代表の監督トルシエ氏がよく口にしていた「リスペクト」の精神（どのようなレベルの相手でも尊重して対等の気持ちで臨むという心の持ち方）を指導するようにした。どの団体の演奏でも、まずはその価値を認める気持ちで鑑賞しようという指導である。

□2002年度

○発声練習の方法が増える

合唱指揮の専門家に外部指導者として指導をお願いし、様々な発声練習の方法を勉強した。わりばしを使う方法等、下級生にも伝達していった。

○体ほぐしの導入

発声練習に入る前の準備として、体をほぐす活動を取り入れた。

□2003年度

○コンクール自由曲最長の曲

3年選択音楽の生徒が参加するコンクールで演奏する自由曲について、附属鎌倉中学校のコンクール参加の歴史において最も演奏時間

の長い曲に挑戦した。

○壁に向かう練習の導入

音楽室や練習会場の壁の方を向いて歌うという練習方法である。個々がしっかり歌い、かつ仲間の音楽を感じて演奏する力を高めることになり、アンサンブル力の向上を図ることができる。

□2004年度

○コミュニケーションを高める練習の導入

保健体育科における「体ほぐしの運動」やレクリエーションで取り組まれている活動を取り入れ、メンバーのコミュニケーションを深め気持ちをつなげる練習として行った。全員、パート別、各パート混合のグループなど多様な集団で実施した。

○暗闇での練習の導入

壁に向かう練習をさらに進化させた練習方法。真っ暗にした部屋で合唱練習を行うもの。個々の歌唱力と仲間の音楽を耳でのみ感じる究極のアンサンブル力の練習である。

〔2〕授業・行事等での取り組みに関する実践

技能面や精神面の指導だけでなく、合唱活動に取り組む場面や、成果を発表する場面の設定についても工夫を施した。

□1997年度

○2年有志で鎌倉市音楽会へ参加（以後定着）

9月に開かれる鎌倉市の中学校音楽会には2年生の有志で合唱団を組織し参加することとした。

○秋の2年選択音楽で3年選択音楽のノウハウを伝達

2年選択音楽を後期に開始し、3年選択音楽で指導したノウハウを指導することとした。3年生がコンクール等の演奏で披露した練習の成果を聴いているので、2年生の取り組みの意識も高く、定着が早いという効果がある。

□1998年度

○担任学級（3年）で毎日の発声練習と合唱練習を開始

附属鎌倉中学校に着任して初めて学級担任と

なったので、学級活動における合唱活動の定着を発信する好機ととらえ、自分の学級において発声練習、合唱練習を毎日少しずつ行うようにした。徐々に他学級に広がっていった。

- 合唱祭自由曲の2年の難易度をあげる
2年生の自由曲の難易度を少しあげることで進歩・発展する意識を持たせるとともに、来年度3年生になったときの難易度向上につなげる意識づくりとした。

- 合唱祭で3年選択音楽の演奏披露開始 (以後定着)

校内行事である合唱祭で3年選択音楽の選択生徒がコンクールで演奏した曲を披露することとした。学習成果の発表とともに下級生への見本という意味もこめられている。

□1999年度

- 合唱祭自由曲の3年の難易度をあげる
前年度難易度をあげた2年生が3年生としても難易度を少しあげ進歩・発展を示した。

□2000年度

- 1年スキー教室で合唱披露 (以後定着)
大きい学年行事の一つであるスキー教室でお世話になったインストラクターや宿の方々に学年全員合唱を披露。学校関係者以外の聴衆に聴いていただくという新たな機会の創造である。

- 1年選択音楽開始
1年選択音楽が開始された。最初は生徒の強い希望で合唱の発展的な学習を行った。

□2001年度

- 2年有志でコンクール参加
2年生に外部からの評価を受ける貴重な機会を与えるため、TBSこども音楽コンクールに有志で参加した。

- 2年選択音楽で演奏会出演
2年生に取り組みの成果を外で披露し評価を受ける機会を与えるため、白いうた青いうたフェスティバルに選択音楽で参加した。

- 2年スキー教室で合唱披露 (以後定着)
一年生の時に引き続き大きい学年行事の一つであるスキー教室でお世話になったインストラクターや宿の方々に学年全員合唱を披露。

学校関係者以外の聴衆に聴いていただくという新たな機会を2年でも創造した。

- 1年選択音楽の内容を国語科との横断的学習にする (以後定着)

前年度から始められた1年生の選択音楽の学習内容を、「詩のボクシング」を題材に国語科と合同で行う横断的な発展的学習として実施した。

□2002年度

- 3年修学旅行で合唱披露

中学校3年間で最大の行事と言ってもよい修学旅行において宿の方々に学年全員合唱を披露。過去2回のスキー教室に引き続き学校関係者以外の聴衆に聴いていただくという貴重な機会の創造になったと同時に、学年行事における合唱活動の定着が完成した。

- 2年選択音楽で参加の演奏会が増える

- 2年選択音楽で合唱曲初演・CD収録

2年選択音楽で横浜市にあるショッピングセンターで行われた神奈川県合唱連盟主催のクリスマスコンサートに出演を依頼され演奏したり、鎌倉市内で行われたチャリティー演奏会に出演する等、演奏会の機会が増えた。また、新作合唱曲の初演と録音の機会をいただき、生徒にとって貴重な体験となった。

□2003年度

- 1年宿泊研修会で発声指導開始 (以後定着)

新入生入学直後に行われる宿泊研修会において、発声指導と斉唱による合唱活動を行うこととした。中学校入学時における合唱活動への導入として以後定着した。

□2004年度

- 3年選択音楽OB合唱団をつくり校内合唱祭で演奏披露

この年の合唱祭が第40回の記念大会ということもあり、コンクールに参加していた3年選択音楽経験者である卒業生でOB合唱団を組織し、演奏を披露してもらった。在校生にとっては、合唱活動の継続性や附属鎌倉中学校における合唱活動の伝統を感じる貴重な機会となった。

〔3〕対外的活動に関する実践

前項と同じく、合唱活動に取り組む場面や、成果を発表する場面の増加についてであるが、ここに挙げるのは、学校外から評価を受けての出演・録音依頼や、他校との交流等の活動により生徒の学習活動に加わった実践内容である。

□1997年度

- 3年選択音楽のコンクール出演に向けた取り組みにおいて、ホール練習を導入した。(以後定着)

□1998年度

- NHK教育テレビの番組「教育トゥデイ」において附属鎌倉中学校の合唱活動が取り上げられた。

□1999年度

- 全日本合唱連盟への加盟
- 合唱連盟主催神奈川県合唱祭への参加演奏を披露する機会が増えることとなった。
- 新曲初演
日本教育音楽協会の依頼で新作合唱曲の初演と録音を行った。

- 公開授業モデル演奏
東京で行われた音楽教育の研究会に2年生の学級が参加し、合唱に関する研究授業のモデルを務め、また演奏会を行った。

□2000年度

- 3年選択音楽にCD収録の依頼があり、合唱曲4曲を録音した。

□2001年度

- 課題曲講習会モデル演奏
東京で行われたNHK全国学校音楽コンクールの課題曲講習会において、3年選択音楽がモデル合唱団を務めた。
- 高文連文化祭に招待演奏
神奈川県高等学校文化連盟の文化祭に招待され、3年生の選択音楽受講者と2年生有志との合同合唱団で演奏を披露した。

- TBSこども音楽コンクール参加
- 白いうた青いうたフェスティバル参加

□2002年度

- 合唱連盟のコンクール参加
全日本合唱連盟主催のコンクールに3年選択

音楽の合唱で初参加した。

○外部指導者の導入

3年選択音楽の授業にゲストティーチャーとして合唱指導の専門家に来ていただき指導を受けた。

○夏合宿をはじめ

○他校との交流練習

3年選択音楽の取り組みの一環として、合宿や他校と交流する練習を始めた。コンクールに参加するために欠かせない宿泊に慣れることと、他校の練習、指導者、生徒から学ぶとすることができるようになった。

○クイーンズスクウェアクリスマスコンサート出演

○関東合唱祭に推薦出演

関東合唱連盟主催の合唱祭に神奈川県合唱連盟から推薦され、3年と2年の選択音楽合同で参加した。他県の高校や一般の合唱団と合同演奏も体験する等、貴重な機会となった。

□2003年度

- 他中学校の芸術鑑賞会で1時間演奏
神奈川県内の公立中学校の芸術鑑賞会に招待され、3年選択音楽の生徒が1時間のプログラムを組み演奏を披露した。

- 3年選択音楽にCD収録の依頼があり、合唱曲4曲を録音した。

4. 授業実践の成果

これまで述べてきたように、筆者は附属鎌倉中学校での多様な合唱活動の中で、指導内容伝達のシステムづくりを行い、7年半にわたり合唱活動の発展的成長につながる指導展開を試みた。

その結果、まず中学校3年間で生徒は次のような変化を示した。^{*5}

- 合唱活動や音楽に対する興味・関心を高め、3年生の時にはほぼ全員が積極性を発揮し合唱活動をはじめとする音楽活動に臨むようになった。

- 興味・関心の高まりに比例して音楽への自信も深めていった。

- 音楽的要素（音程、ハーモニー、発声等）と形式陶治的要素（協力、努力、精神力等）の両方

を身に付けていた。

一方、一つの学年の成長という枠を越えた合唱活動の発展については、対外的発表の場面であり合唱の演奏について評価をされる場面でもあるコンクールの結果でみてみたい。

附属鎌倉中学校は長く伝統的に「NHK全国学校音楽コンクール」*⁶に有志の合唱団で参加していた。これについては筆者が着任した1997年度の前年より3年選択音楽の受講者で参加することに改められた。

筆者はそれに加え、本実践を行う中で2002年度より「全日本合唱連盟」が行っている「全日本合唱コンクール」*⁷にも参加することとした。

各コンクールの結果を年度ごとにまとめると次のようになる。

□NHK全国学校音楽コンクール

○1997年度

県大会金賞、関東甲信越ブロック大会金賞
全国大会奨励賞（全国大会には学校としても神奈川県代表としても44年ぶりの出場であった）

○1998年度

県大会金賞、関東甲信越ブロック大会銅賞

○1999年度

県大会金賞、関東甲信越ブロック大会金賞
全国大会奨励賞

○2000年度

県大会金賞、関東甲信越ブロック大会銅賞

○2001年度

県大会金賞、関東甲信越ブロック大会奨励賞

○2002年度

県大会金賞、関東甲信越ブロック大会銀賞

○2003年度

県大会銀賞

○2004年度

県大会金賞、関東甲信越ブロック大会金賞
全国大会銅賞

□全日本合唱コンクール

○2002年度

県大会金賞、関東支部大会金賞、全国大会銀賞

○2003年度

県大会金賞、関東支部大会金賞、全国大会金賞

○2004年度

県大会金賞、関東支部大会金賞

NHK全国学校音楽コンクールの結果をみると、実践初期の段階で全国大会2回出場という結果が出ており、指導の大きな効果が見られる。その後、ブロック大会がテープ審査ではなく会場審査となってから一時全国大会出場がなくなるが、実践最終年度には全国大会銅賞（3、4位）の結果を得るに至った。

また全日本合唱コンクールについては、実践後半の3年間の出場であるが、全国大会で銀賞1、金賞1という結果を得るに至っている。

コンクールに参加するのが、中学校3年間を通じて取り組む部活動ではなく、3年生の4月から取り組む選択音楽の授業の生徒であり、取り組みわずか半年で上記の評価をいただいていることを考え合わせれば、この結果は附属鎌倉中学校の合唱活動の展開のあり方及び段階的に発展させていった指導実践の大きな成果の一つと言える。

またこの実践は、合唱についての発展的な内容を扱う選択音楽の授業が、生徒の音楽的成長と学校の合唱活動の発展に有効であるということも示唆していよう。

1年生では、国語科との横断的学習として、合唱と「詩のボクシング」を題材とした学習を、2、3年生では、演奏会での発表や合唱活動のリーダー的人材の養成を目指した発展的な学習に取り組みさせたが、生徒の関心・意欲が極めて高いという選択ならではの利点を活かし、対外的発表（コンクールやフェスティバル等への参加）も積極的に取り入れ学習成果を発表の場でしっかりと発揮する体験を積ませることで、自己満足に終わらせず、聴衆に歌声をとどけ、評価をいただくというプロセスまで含め、総合的な音楽表現として学習させることができたわけである。

そして、その学びが指導内容伝達システムを通じて次の学年へと受け継がれ、さらに新しい指導内容が加わって発展するという好循環が生まれることとなったのである。

5. まとめと課題

本研究と授業実践の成果としては次の5点を挙げることができる。

- 指導内容伝達のシステムの確立は、合唱活動の発展的成長と生徒の音楽的成長に有効である。
- 毎年必ず新しい試みを加える指導方法は、合唱活動の発展に有効である。
- 指導内容の重点化と精選は合唱活動の発展に有効である。
- 合唱についての発展的な内容を扱う選択音楽の授業は、生徒の音楽的成長と学校全体の合唱活動の発展に有効である。
- 対外的発表の場を活かすことは、合唱活動の発展に有効である。
一方、今後の課題としては、次の点をあげておきたい。
- 対外的発表の場が増えた事による生徒の負担の増加についての検証が必要である。
- 初等教育における合唱活動の展開についても研究する必要がある。

以上の二点を本研究の課題として、今後も合唱指導についての研究・実践に取り組んでいきたい。

【注】

- * 1 文部科学省：「中学校学習指導要領（平成10年12月）」改訂版, 2004, 5頁
- * 2 文部科学省：「中学校学習指導要領（平成10年12月）」改訂版, 2004, 64, 65頁
- * 3 附属鎌倉中学校では一学級40名が原則であるが、帰国子女の受け入れを行っているため、その分の人数が各学年15名ずつプラスされている。
- * 4 文部科学省：「中学校学習指導要領（平成10年12月）」改訂版, 2004, 5頁
- * 5 中学校3年間を通じた合唱活動の効果については、本研究の前に拙論「多様な音楽に対する感性の育成を目指す学習指導のあり方」（横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校研究紀要第24集, 2000）において取りあげている。
- * 6 NHK全国学校音楽コンクールは、小学

校・中学校・高等学校の児童・生徒を対象とした合唱のコンクールである。主催はNHK、全日本音楽教育研究会、日本教育音楽協会である。

昭和7年に児童唱歌コンクールとして始まり、中学校の部が加わったのは昭和24年である。本年度で75回を数える伝統あるコンクールである。

参加校は、まず、都府県地区（北海道は地区）ごとに行われるコンクールに出場する。そこで金賞に選ばれると、次に全国を8つのブロックに分けたブロックコンクールに出場する。そこでも金賞に選ばれるとさらに東京のNHKホールで行われる全国コンクールへ進むことになる。

賞には金、銀、銅と奨励賞がある（本実践当時）。審査は合唱指揮者や作曲家、声楽家、音楽教育関係者などが行っている。

- * 7 全日本合唱コンクールは、中学校、高校、大学、職場、一般の五部門で行われる合唱のコンクールである。主催は全日本合唱連盟と朝日新聞社である。

昭和23年から実施され本年度で61回を数える伝統あるコンクールである。

参加団体は、まず都道府県コンクールに出場し、そこで代表に選ばれると支部大会に出場する。そこでも代表に選ばれると全国大会に進むことになる。

賞には金、銀、銅賞がある。審査は合唱指揮者や作曲家、声楽家等が行っている。

資料 指導の内容

年度	発声・合唱練習の改善	授業・行事等での取り組み	対外的活動
97	○ファルセットへの意識付け ○ア・カベラへの意識付け	○2年有志で鎌倉市音楽会へ参加 ○秋の2年選択音楽で3年選択音楽のノウハウを伝達	○ホール練習の導入
98	○取り上げる楽曲の音域の拡大	○担任学級(3年)で毎日の発声練習と合唱練習を開始 ○合唱祭自由曲の2年の難易度をあげる ○合唱祭で3年選択音楽の演奏披露開始	○NHK教育テレビで合唱活動が取りあげられる。
99	○コンクールでア・カベラ挑戦	○合唱祭自由曲の3年の難易度をあげる	○全日本合唱連盟への加盟 ○合唱連盟主催神奈川県合唱祭への参加 ○新曲初演 ○公開授業モデル演奏
00	○丹田息の導入 ○手をつなぐ練習の導入	○1年スキー教室で合唱披露 ○1年選択音楽開始	○CD収録
01	○1年最初の授業で、トトロ、ミッキー、温かい息の発声練習開始 ○ア・カベラの声部数拡大 ○「リスペクトの心」指導開始	○2年有志でコンクール参加 ○2年選択音楽で演奏会出演 ○2年スキー教室で合唱披露 ○1年選択音楽の内容を国語科との横断的学習にする	○課題曲講習会モデル演奏 ○高文連文化祭に招待演奏 ○TBSこども音楽コンクール参加 ○白いうた青いうたフェスティバル参加
02	○発声練習の方法が増える ○体ほぐしの導入	○3年修学旅行で合唱披露 ○2年選択音楽で参加の演奏会が増える ○2年選択音楽で合唱曲初演・CD収録	○合唱連盟のコンクール参加 ○外部指導者の導入 ○夏合宿をはじめる ○他校との交流練習 ○クイーンズスクウェアクリスマスコンサート出演 ○関東合唱祭に推薦出演
03	○コンクール自由曲最長の曲 ○壁に向かう練習の導入	○1年宿泊研修会で発声指導開始	○他中学校の芸術鑑賞会で1時間演奏 ○CD収録
04	○コミュニケーションを高める練習の導入 ○暗闇での練習の導入	○3年選択音楽OB合唱団をつくり校内合唱祭で演奏披露	